

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-9

並木通り四丁目のKビルの三階にある『こはる』は、この界隈の一流クラブと同様に完全会員制で、営業時間は二十時から午前零時迄、土日祝日休みの体制を取っていた。

八階建てのKビルは、一階には花屋の『フラワーベッド・レイコ』があった。

オーナーの令子は、パリの有名花店で五年程修業を積んだのち当所に店舗を構えて二十年になる。フラワーベッドは英語で花壇の意味で、最初は同意語でフランス語のバルテールにしよう決めていたが、結局は分かりやすい前者に落ち着いた。

二十年と言っても、銀座では新参者と見なされる業界で、フラワーアーティスト令子として人気ブランドなどの装花も手掛けるまでになっていた。

真紀が二十八歳で『こはる』を開店した当時、『フラワーベッド』は十周年を迎える頃だった。

一回りほど年上の令子と妙に馬が合った真紀は、開店前から何かにつけて相談に乗ってもらった。

『フラワーベッド』では、花の他に蓼科高原産のジャムを販売していた。中でも特に無花果にクルミを混ぜたジャムが真紀のお気に入りだった。

『フラワーベッド』の店舗スタッフの一人ひとは、『こはる』の店内に一日ごとに生け換えられる花装飾用の花々について、営業時間帯の数時間に色感と生命力がピークになるような生け方を令子から習得していた。

生き生きとした花々の表情は、ともすればマンネリになりがちな、日々の出勤時のホステスたちの空気感にも、新たな緊張をもたらしていた。

いつもの真紀は、店のある三階まで階段を上るようにしていた。

二十段上がって踊り場、また、二十段上がり踊り場、手動のドアを開けると厨房があって、二人のコックが仕込みの準備に立ち働いていた。

着物姿で階段を上るのは、なおさら苦労だったが、一段一段を踏みしめることで、研ぎ澄まされた仕事モードに切り替えていく祈りにも似た儀式であった。

バックヤードを除き、専有面積百平米の店内は、入口に設けたクロークの脇にカウンター八席のウェィティングバーがあり、その先には全体的にゆったりとレイアウトされたボックス席があった。